

提出日：平成 30 年 2 月 15 日

所属：東京大学附属図書館

氏名：横井慶子

1. 期間 平成 29 年 10 月 2 日～平成 29 年 12 月 26 日

2. 場所 欧州原子核研究機構 (CERN)

3. 研修内容

(INSPIRE 日常業務)

- INSPIRE論文メタデータ処理業務
- INSPIRE著者情報 (HepNames、Author Profile 等) の充実

(ORCID 普及支援)

- INSPIREとORCIDの著者データの連携機能を説明するウェブページの日本語訳
- INSPIREとORCID間で論文データをインポート、エクスポートする手順書作成

(会議等)

- 蔵川先生との打ち合わせ (10/4-6; CERN)
- CERN/NII遠隔会議 (11/9,12/4)

(その他)

- Topical group gathering 聴講 (11/1)

4. 出張

1) ICOLC 参加 (10/15-18)

プラハで開催された ICOLC2017 に参加し、オープンアクセス環境下における雑誌契約の国際的な現状に関して情報収集を行った。

2) ドイツ国立科学技術図書館 (TIB) 訪問調査 (12/19)

RADAR (Research Data Repository) および、電子ジャーナル契約の現状について情報収集を行った。

3) Max Planck Digital Library (MPDL) 訪問調査 (12/21)

研究者の論文投稿状況の把握、管理手法およびオフセット契約締結における注意点などについて情報収集を行った。

## 5. 所感

INSPIRE の質向上プロジェクトでは、データ整備の効率化について考えさせられた。INSPIRE のデータを整備する上で必要となる根拠データを得るには、KAKEN や所属大学の公開する研究者情報、研究者個人のウェブサイトなど複数の情報源にあたる必要があり、1 件あたりの処理にかなりの時間を要した。CERN としては、将来的には ORCID と INSPIRE と連携させることで INSPIRE の質向上につなげたいとのことだった。この方策は今後も予想される論文数の増加や、共著者数の多い高エネルギー物理学分野において、極めて有効で効率的だと感じた。日本国内の機関リポジトリや研究者情報データベースでも、こういった方策をうまく取り入れ、研究者と図書館員や事務職員双方の負担を軽減しつつ、正確さと網羅性の向上につながればよいと感じた。

その他、上述の実作業以外の場面でも、貴重な経験や印象深く感じたことが主に 3 点あった。

1 つ目は、同僚とのディスカッションである。CERN スタッフが自発的にトピックを用意してプレゼンし、同僚とディスカッションする Topical group gathering に参加する機会を得た。自分の参加回のトピックは、SCOAP<sup>3</sup> 始動前後における、対象誌の雑誌ウェブサイトおよび arXiv からのプレプリントのダウンロード数の変化だった。ディスカッションでは、目の前の現象に対して、参加者が自由に意見を出し合い、分析や解釈を試みた。「正解」のない状況で、参加者全員で思考する行為を通して、視野が広がって深い考察ができ、とても刺激的な経験となった。

2 つ目は、専門性と雇用関係である。MPDL 訪問時に対応された 3 名が、自己紹介で「MPDL 歴は〇年（いずれも 5 年以下）」と名乗られ、うち 2 名は有期雇用、無期雇用の方（契約担当）はもともと航空関係の民間会社勤務とのことだった。また論文調査を行う Data Analysis team に求められるスキルは、PostgreSQL と PYTHON を用いたデータ分析能力のみで、図書館員ではなかった。「図書館員」という枠組みを超え、雇用する側と雇用される側の双方が、専門性の需給の一致するタイミングで雇用関係を結ぶというあり方がとても興味深かった。

3 つ目は、実験系物理学者の研究実態である。ATLAS の責任者である東京大学の教員と、懇談する機会を数回得られた。実験に関わる全容をご説明いただき、国際的な研究グループの研究実態を垣間見ることができた。具体的には、各国の研究助成を受けているがゆえに、研究結果の公開に強い義務感を感じることに、滞りなく実験を遂行することへの大きな責任感とプレッシャー、異なる考えをもつ外国人研究者との共同研究を進める上での配慮などである。また、ヒッグス粒子の発見が、次の大規模実験を実現する上での大きな後押し（CERN からの GO サイン）につながったとの話も大変興味深かった。

いずれも日本国内の日常業務ではなかなか体験できないことで、このような貴重な経験ができたことは大変有意義であった。日本と欧州とでは大学・研究図書館の置かれている環境や下地が異なるため、今回学んだこと全てをそのまま日本での業務に反映させることは難しいと思う。しかし、そのまま反映できない部分も、大学図書館の課題を検討する上での参考となるものであり、日本の事情に合わせての改善、解決につなげられるよう活用したい。また、今回得られた人的つながりも大切にして、今後の大学図書館業務に貢献できるようにしたい。

以上